山梨県北杜市明野町上神取

諏訪原遺跡発掘調査概報

2010年度

2010.12

昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科

例　　言

1．本書は、山梨県北杜市明野町上神取1558-1に所在する諏訪原遺跡の2010年度発掘調査概報である。

2．発掘調査は、2010年８月９日から21日まで実施した。

3．発掘調査は昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が主体となり、山梨県教育委員会・北杜市教育委員会の指導のもと、昭和女子大学大学院研究生・大学院生・学部学生が参加し実施された。

4．発掘調査は、昭和女子大学大学院生活機構研究科教授　山本暉久・同人間文化学部歴史文化学科准教授小泉玲子が担当した。

5．発掘調査は、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2010年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡の発掘調査を通じた体験型実習の実践」ならびに「平成22年度学長裁量研究費」により実施された。

6．諏訪原遺跡の発掘調査は今後とも、毎年、夏季休暇期間を利用して継続的に実施する予定である。

7．発掘調査により発見された遺物は、現在、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科において保管中であるが、正式な発掘調査報告書が刊行されたあと、北杜市教育委員会に返還する予定である。

8．本調査概報は、調査参加学生の協力を得て出土品整理および実測図面の整理・トレースを行い、山本暉久および大学院研究生・大学院生の原稿にもとづき、小泉玲子と山本暉久がとりまとめた。

9．発掘調査にあたっては、山梨県教育委員会、北杜市教育委員会のご協力をえたほか、下記の方々からご指導いただいた。あつく感謝したい。

佐野　隆(北杜市教育委員会)、千葉　毅(神奈川県立歴史博物館)、菅谷通保、大網信良(早稲田大学大学院)、石川真理子(松本市教育委員会)、植月　学(山梨県立博物館)、植月未来、中島将太(杉並区教育委員会)、領家玲美(昭和女子大学大学院生活機構研究科博士課程)、江川真澄(相模原市教育委員会)、岩井良栄・井口真理子・松木小枝・結城晶子(昭和女子大学ＯＧ)

目　　次

1．調 査 経 緯 ……1
2．遺跡の位置 ……2
3．調 査 経 過 ……3
4．発見遺構と遺物 ……5
5．ま　と　め ……17

挿図目次

図１　遺跡の位置 ……2
図２　調査地区全体図 ……4
図３　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　発掘現況図・Ｐ１平断面図 ……6
図４　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　４号土坑・３号土坑 ……8
図５　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　発掘現況図 ……9
図６　Ａ－７グリッド１号溝状遺構・ＳＷＵ－ＰＪ３号住 遺物出土状態 ……12
図７　ＳＷＵ－ＰＪ３号住 発掘現況図 ……13

１．調 査 経 緯

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科は、2007(平成19)年度より、山梨県北杜市明野町上神取に所在する縄文時代中期の集落址である諏訪原遺跡の学術調査を開始した。

これまでの三次にわたる調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居址３軒、土坑、中世末から近世期と思われる道路状遺構等が確認され、多大な成果をあげることができた。その調査結果の概要については、別に報告済み(昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科編　2007・2008・2009)であるので、それに譲るが、昨年度の調査では、とくに、Ｂ－６・７グリッドにまたがって発見された狭長な鉄平石が、石囲炉址であることが明らかとなり、住居址が存在することが確実視されたことから、この石囲炉をもつ住居址をＳＷＵ－ＰＪ３号住と命名し周辺部の調査を行った。この結果、４号土坑に検出された底部穿孔倒置深鉢形土器は、この住居址に伴うものと判断された。今年度は、検出されているＳＷＵ－ＰＪ１号住～ＳＷＵ－ＰＪ３号住の調査の継続的調査と、昨年調査区を設定したものの、時間的関係から未調査に終わった道路側のＡ－７グリッドの調査を新たに実施することとした。

調査の対象地は、諏訪原遺跡が所在する上神取集落内の上神取1558-1番地(土地所有者　村田勝海)の約700㎡である。この調査対象地は、かつては養蚕のための桑畑であったが、現在は桑栽培は放棄され雑草地となっていた。昨年度の調査・埋戻し後、約１年間を経過して、再び雑草が繁茂していたため、昨年度と同様、北杜市教育委員にお願いして事前に草刈りをしていただくこととなった。

調査にあたっては、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科2010年度プロジェクト予算「山梨県北杜市諏訪原遺跡発掘調査を通じた体験型実習の実践」及び「2010年度学長裁量研究費」により実施することとなった。

今年度の調査は、これまでと同様、夏季休暇期間を利用して、８月８日現地設営、９～21日発掘調査、22日撤収の予定で調査を実施することとなった。参加学生は、今年度から５月当初に参加希望者を先着順で募り、応募のあった学生を参加させることとした。また、短期間であるが卒業生も参加することとなった。宿舎はこれまでと同様に、韮崎市穴山町にある旅館「穴山温泉能見荘」とし、遺跡現地への往復には、マイクロバスタクシーを利用することとした。このような経緯を経て、土地所有者である村田勝海氏の承諾をえて、北杜市教育委員会の指導のもと、発掘調査に至ったものである。

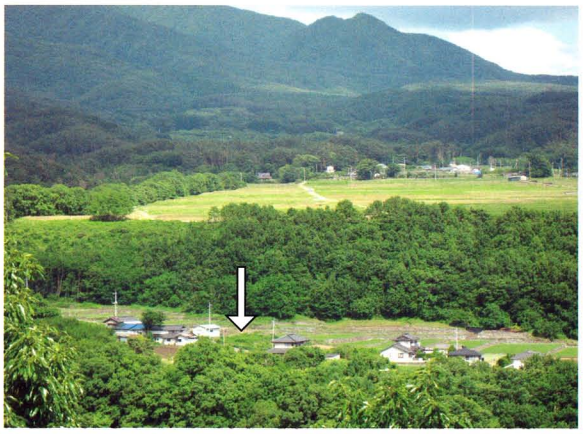

写真１　遺跡遠景　塩川右岸から

写真２　発掘開始前の現況　2010. 8. 8

2．遺跡の位置

遺跡は、山梨県の北方に位置し、山梨県北杜市明野町(旧・北巨摩郡明野村)上神取1558－1番地に所在する(図１)。標高約550m、塩川左岸の河岸段丘面に広がる遺跡で、東側には標高1700mを越す茅ヶ岳・金ケ岳の雄大な山麓が広がり、北西には八ヶ岳山麓、南西方向には、南アルプスの山々が望まれる風光明媚な場所に位置している。これまでの調査結果によると、「茅ケ岳山麓でも最大級の規模を誇る」とされ、「遺跡の広がりは２万㎡以上におよび、100軒を優に超える住居址が埋蔵されていると考えられる」(佐野 1996)、縄文時代中期の大規模な拠点的環状集落址である。

養蚕業不振により桑の栽培が放棄され、それに変わって、畑地への転化や宅地化が進みつつあり、そうした状況の中、桑の抜根による遺跡破壊に対処することを目的として、明野村教育委員会により、1992(平成４)年から2003(平成15)年にかけて８次にわたる発掘調査が断続的に行われてきた(佐野 1996・2003・04)。

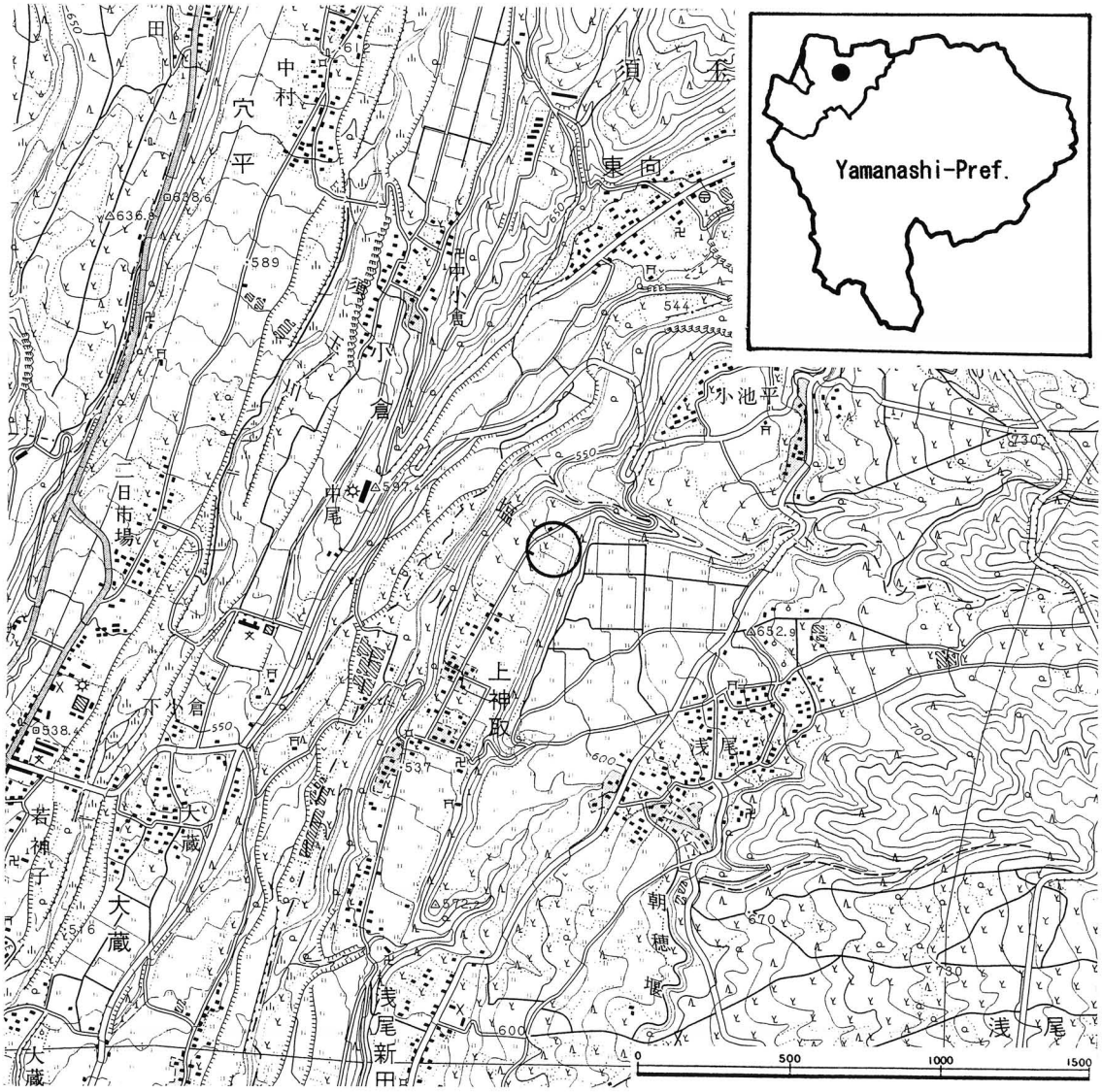

図１　遺跡の位置　1/25,000

３．調 査 経 過

調査はまず、埋戻し土の除去を行った後、昨年度設定しながら調査出来なかった調査区西側の道路側に沿ってＡ－７グリッドに北側２ｍ、南側に３ｍの台形状の拡張区をあらためて設定した（図２・写真３）。また、ＳＷＵ－ＰＪ３号住の壁面を確認するため、第１次調査後埋め戻してある、Ｃ－７グリッドの北西隅を東西２×南北５ｍの範囲で再発掘を行った。

ＳＷＵ－ＰＪ１号住は、昨年柱穴の発掘が一部半截した段階で終わっていたので、その全截と他に確認されて未調査であった柱穴の調査を行った。また、壁面の確認を継続し、とくにＣ－７グリッドとの境界のベルト部分の発掘を行い、南壁の確認作業を行った。また、壁面に認められた周溝の調査も行い、調査区内でのプランの全容を明らかにすることができた。

ＳＷＵ－ＰＪ２号住は、住居址内に確認されていた配石をもつ４号土坑の完掘、３号土坑内に検出されていた土器破片集中部の実測と取りあげ、西側に検出された複雑な切り合いをもつ落ち込みの精査を行い、ほぼ調査を完了することができた。

また、Ａ－７グリッドに設定した拡張区では、Ｂ・Ｃ－７区に東西方向に検出されていた１号道路状遺構の続きが検出されたので、その調査を行った後、下面の縄文面の土坑状の落ち込みを確認した。ＳＷＵ－ＰＪ３号住は確認された柱穴の半截を行ったが、今年度の調査では全截に至らなかった。

調査は、前半は台風の影響から、天候は不順であったが、後半は好天に恵まれた。現状での遺構図面を作成し、全体写真を撮影後、埋め戻しを行い、今年度の調査を無事終了することができた。　　（山本暉久）

写真３　発掘区の設定　写真右側が新たに設定した拡張区（Ａ－７グリッド）

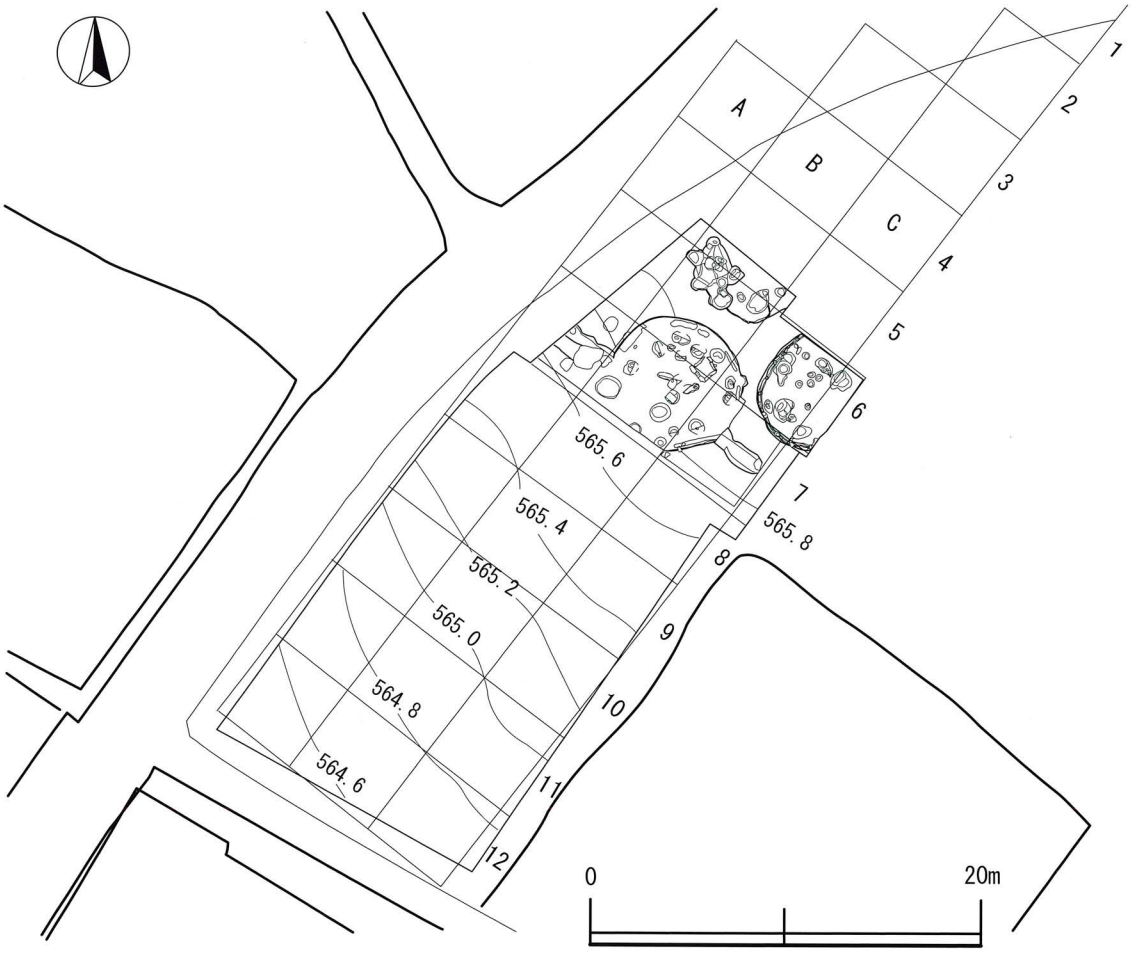

図２　調査地区全体図　1/400

写真４　調査風景

４．発見遺構と遺物

ＳＷＵ－ＰＪ１号住(図３、写真５～７・23)

ＳＷＵ－ＰＪ１号住は、住居址覆土中に丸石などの礫等が大量に廃棄されて検出されたが、昨年度の調査では礫群の除去と、ピット等の確認及び一部の半截までにとどまった。今年度の調査では昨年度に引き続き、住居址の壁面及び周溝等、未調査であった柱穴状の落ち込みの調査を行い住居址全体のプランを明らかにし完掘することを課題とした。

まず住居址の壁面を検出するために、Ｃ－７グリッド北側に60㎝×５ｍの範囲を拡張し掘り下げを行い、調査を行った。その結果、壁面及び周溝、壁柱穴を検出した。拡張部を含め住居址の規模は長軸6.12ｍ、短軸約4.5ｍを呈し、壁高約26～30㎝、周溝の深さは約５～８㎝を測る。また昨年度の調査で半截を行ったＰ１～５と、未調査であった柱穴状の落ち込みをＰ６～14と命名し調査を行った。

ピットを完掘した結果Ｐ１は長径約1.14ｍ×短径約１ｍ、最深52㎝を測る。ピットの東側から一部で焼土と土器が集中して出土した。勝坂式期の土器だが一部接合可能で、複数の土器からなる(写真 23)。Ｐ２はＰ12と続いており長径約1.08ｍ×短径約0.4ｍ、Ｐ２は最深48㎝、Ｐ12は最深42㎝を測り土層は６層からなる。Ｐ２から約10㎝の炭化物を検出し、Ｐ12からは焼土を検出した。Ｐ３はピットが重複していると思われるが、長径約1.82ｍ×短径約0.82ｍ、最深53.5㎝を測り、ピット壁面近くから石棒破片が出土している(写真23)。Ｐ４は複数が重複していると思われるが長径約1.2ｍ×短径約0.9ｍ、最深74.8㎝を測り、土器片が出土している。Ｐ５は長径約1.06ｍ×短径約0.7ｍ、深度63㎝を測り土器片が出土している。Ｐ６～11は長径約0.4ｍ×短径0.3～0.4ｍを測り、最深11～18.5㎝と浅い。Ｐ７・10からは土器片が出土しているが、それ以外のピットでは遺物は出土していない。Ｐ13は長径0.46ｍ×短径0.3ｍ、深度20㎝を測る。Ｐ14は長径0.74ｍ×0.44ｍ、深度44.5㎝を測る。またＰ１・４・５は水田が隣接していることから、水が湧いてきてしまい底部の検出は困難で断念した。調査の結果、主柱穴はＰ１・３～５で建替を行っていると考えられる。

また住居址の北西壁面から井戸尻式の土器片が出土しており、ピットから出土した土器から判断して、本住居址は井戸尻式期に所属するものと思われる。

今年度の調査では、住居址の壁面及び柱穴等を検出し住居の規模が広がることが明らかにできたが、完掘に至らなかった。来年度も一部を拡張をし、引き続き調査をし完掘を目指したい。　　(大野節子)

写真５　ＳＷＵ－ＰＪ１号住調査風景

写真６　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　柱穴ピット調査風景

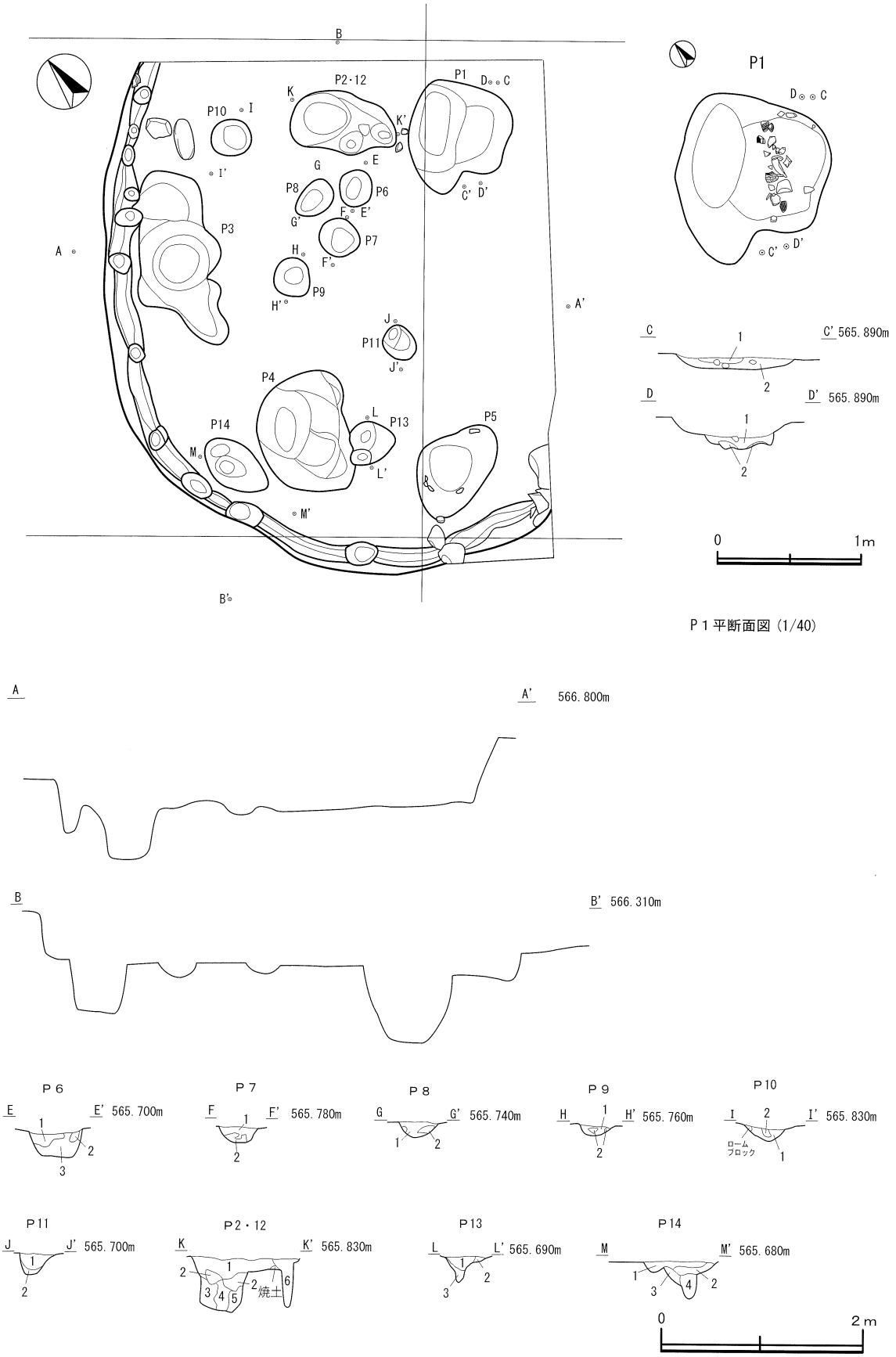

図３　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　発掘現況図(1/60)・Ｐ１平断面図(1/40)

ＳＷＵ－ＰＪ１号住土層注記

P6
1:10YR3/3　暗褐色　１mm以下の白色粒1%含む、粘性・しまりあり
2:10YR2/3　黒褐色　１mm以下の白色粒1%含む、１層より粘性・しまりあり
3:10YR4/3　にぶい黄褐色　１～２mmの白色粒３%・２層を少量含む、粘性・しまりあり

P7・P9
1:10YR2/3　黒褐色　１mm以下の白色粒１%、粘性・しまりあり
2:10YR4/3　にぶい黄褐色　１～２mmの白色粒３%、１層よりしまり・粘性あり

P8
1:10YR3/3　暗褐色　橙色スコリア粒・白色粒１%含む、粘性・しまりあり
2:10YR4/4　褐色　橙色スコリア粒１%含む、粘性・しまりあり

P10
1:10YR3/3　暗褐色　橙色スコリア粒25%含む、粘性・しまりあり
2:10YR4/4　褐色　橙色スコリア粒５%・白色粒１%・炭化物少量含む、粘性・しまりあり

P11
1:10YR2/3　黒褐色　白色粒１%・５mm以下の炭化物２%含む、粘性・しまりあり
2:10YR3/4　暗褐色　２mm以下の白色粒２%・炭化物１%含む、粘性・しまりあり

P12
1:10YR2/2　黒褐色　炭化物・焼土１%含む、粘性・しまりあり
2:10YR4/6　褐色　１～３mmの白色粒３%含む、粘性・しまりあり
3:10YR3/3　暗褐色　黒色土ブロック１%・黒色粒５%含む、粘性・しまりあり
4:10YR3/3　暗褐色　３層に類似するが黒色土ブロックを含まない、粘性・しまりあり
5:10YR3/3　暗褐色　４層に類似するが４層より堅くしまっている、粘性・しまりあり
6:10YR4/4　黒褐色　白色粒・炭化物１%含む、粘性・しまりあり
焼土:2.5YR4/6　赤褐色　粘性・しまりあり

P13
1:10YR3/3　暗褐色　黒色粒・橙色スコリア粒１%・ローム混じり・炭化物を少量含む、粘性・しまりあり
2:10YR4/4　褐色　白色粒２%・１層を少量含む、粘性・しまりあり
3:10YR4/6　褐色　２層に類似するが白色粒・橙色スコリア粒２%含む、粘性・しまりあり

P14
1:10YR3/3　暗褐色　２mm以下の炭化物１%・３mm以下の白色粒２%含む、粘性・しまりあり
2:10YR4/4　褐色　白色粒１%・１層を少量含む、粘性・しまりあり
3:10YR4/4　褐色　２層を類似するが、２層よりも粘性あり・しまりあり
4:10YR3/4　暗褐色　２mm以下の橙色スコリア粒１%・黒色粒１%含む、粘性・しまりあり

写真７　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　北側から

ＳＷＵ－ＰＪ２号住(図４・５、写真８～14・24・25・27)

本住居址は、昨年度の継続調査として、床面と柱穴等の落ち込みの確認を行った。まず、昨年度の調査で確認されたＰ２を、４号土坑と改め調査を行い、輪郭を確定した。長軸約1.8m×短軸約１mの楕円形を呈し、最大深度約30cmを測る土坑となった。北側に見られる深さ約50cmの柱穴状の落ち込みに関しては、柱穴であると考えられる。内部からはまた新たに井戸尻式期の土器片が出土している(図４・写真14)。また、昨年度の終わりに井戸尻式期の土器片が一括出土したＰ４・Ｂを３号土坑と改め、完掘を目指し調査を行った。長軸約１m×短軸約0.8mのやや楕円形を呈し、最大深度約20cmの土坑となった(写真10)。一括出土した土器片は同一個体ではなく、一部接合可能ではあるものの、複数の土器からなるものであった。時期的には井戸尻式期に相当する(図５・写真24)。

今年度は新たに、住居址中央にＰ６を確認した。長径約50cm×短径約40cmの楕円形を呈し、最大深度は15cmほどのピットだが、中央に斜縄文をもつ深鉢形土器の胴部破片が一括して出土したが、接合が不十分で埋甕のようなありかたは示していない(写真11・25)。住居址西側は、再調査の結果、住居址の半分を占める大規模なピット群となった。昨年度の調査結果を再検討した結果、一部が掘りすぎと確認されたので、今年度の調査で、一部修正し、あらためて図面を作成した。ただ、ピット群の重複がなぜ生じたのかは不明である。このほか、昨年度の調査で住居址東側に確認された落ち込みＰ５は、長径約90cm×短径約50cm、最大深度約20cmとなり、ピット群と重複することが確認できた。また、昨年度半截するにとどまった２号土坑も、完掘した結果、ピット群と重複している。この２号土坑で検出された土器は、斜縄文をもつ小形の深鉢形土器である(写真27)。本住居址の所属時期は、これまでの出土遺物から判断して、中期中葉期と思われる。

今年度の調査により、本住居址の全貌を明らかにすることができた。住居址北側は拡張が困難なため調査することができなかったが、調査の結果、東西約６m×南北約３mの住居址であることがわかった。西側には複雑に重複したピットや土坑があり、東側には配石土坑があるなど、はっきりと柱穴といえるものはなく、住居址としての性格は不明瞭ではあるものの、今年度で本住居址の調査は終了とした。　　(鑑田夏実)

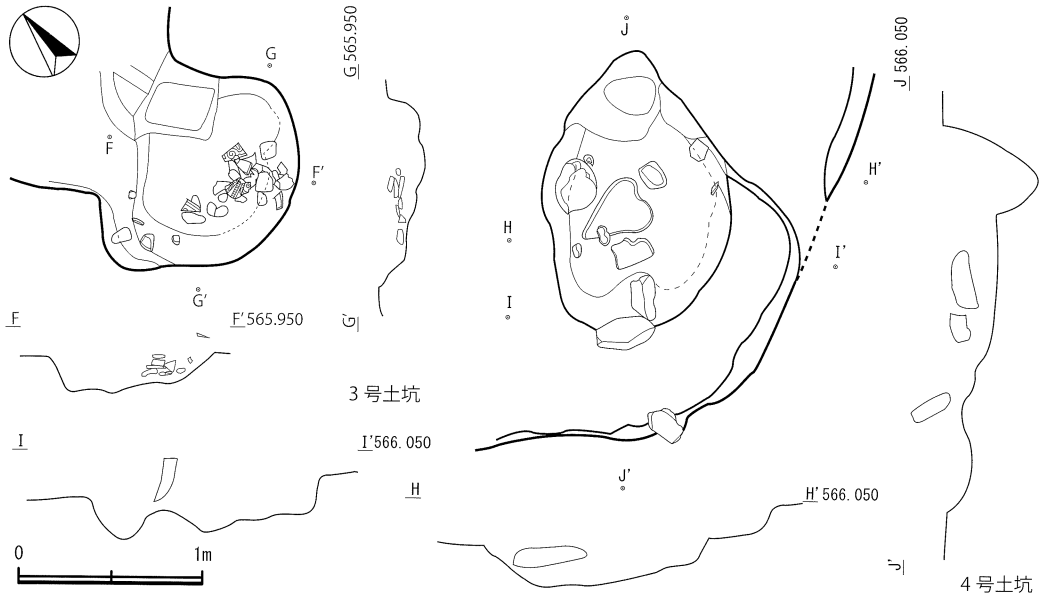

図４　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　４号土坑(1/40)・３号土坑(1/40)

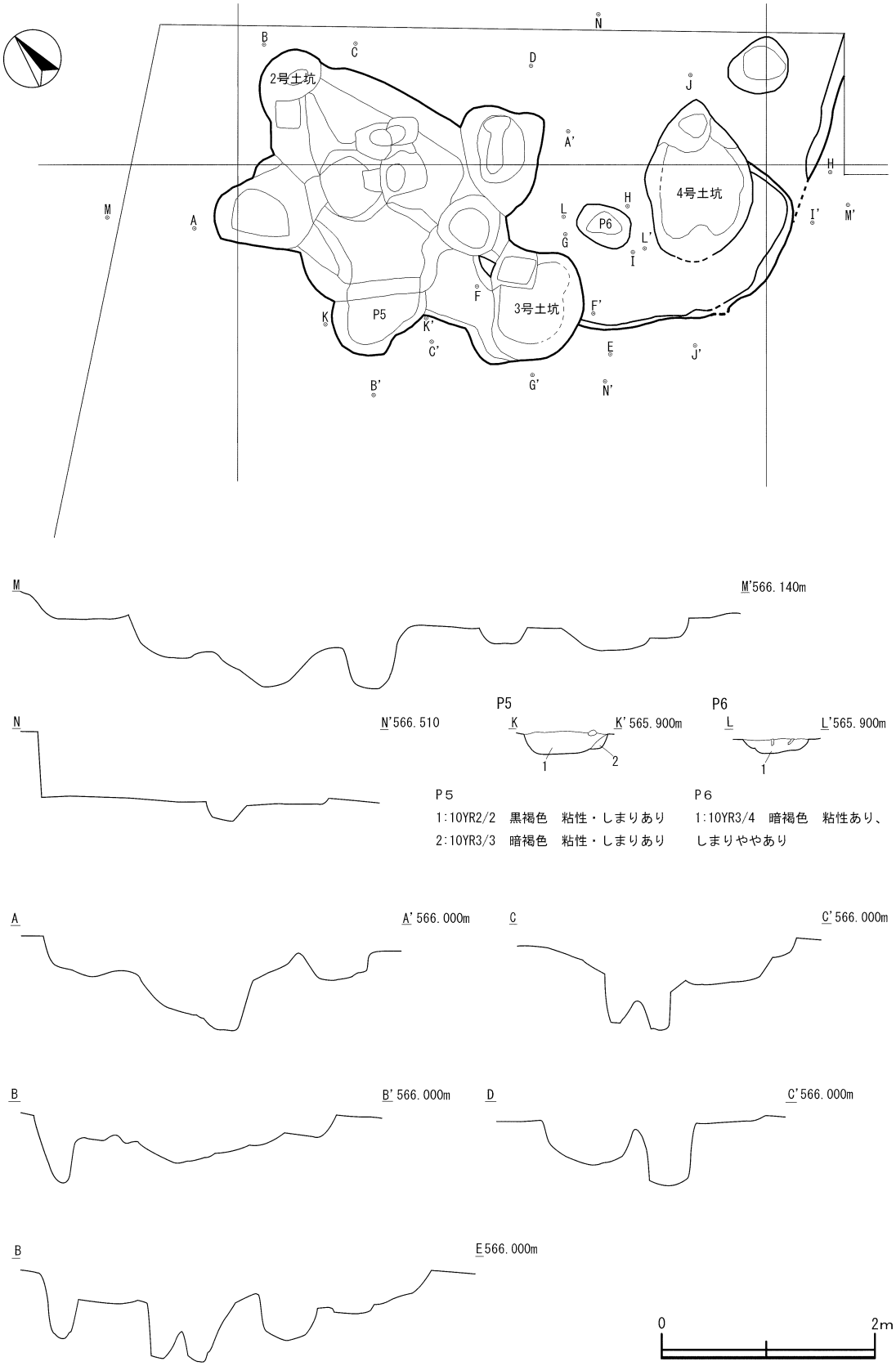

図５　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　発掘現況図(1/60)

写真８　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　２号土坑配石面　東側から

写真９　ＳＷＵ－ＰＪ２号住 完掘後全景　西側から

写真10　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　３号土坑

写真11　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　Ｐ６遺物出土状態

写真12　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　調査風景

写真13　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　調査風景

写真14　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　４号土坑

ＳＷＵ－ＰＪ３号住(図６・７、写真15～22・26)

昨年度の調査で確認された竪穴住居址、ＳＷＵ－ＰＪ３号住のプラン全体を明らかにするため、住居内のピット及び周辺部の調査を行い、壁の確認と床面の追求を行った。昨年度の調査においてＣ－７グリッド北西隅の再発掘を行い、竪穴住居の壁が確認されていたため、今年度の調査では更にこの南側の再発掘を行った。その結果、南東側に竪穴住居の壁が確認された。Ｂ－７・Ｃ－７間のベルトを除去し、東南側の壁の確認と床面の追求を行う際に、グリットライン際でまとまった土器の破片が出土した(写真18)。土器の破片のまわりに落ち込みが確認されたため、ピット内から出土しているものと思われたので、このピットをＰ８と命名して後に調査を行った。その結果、ピット内から数点の土器片が出土した。この土器は列点文と沈線文をもつ曽利Ⅱ式期で、2007年度に行った３号土坑から出土した土器と同じ時期に相当する。

また、住居の東側の壁の調査を行ったところ、確認された壁際の覆土中から、逆Ｕ字沈線の中に縄文を充填した土器(図７右・写真17・26)が出土した。時期は加曽利Ｅ式期末に相当する土器である。４号土坑出土の底部穿孔倒置深鉢形土器よりも時期が新しいので、住居廃絶後埋設されたものと思われる。

ＳＷＵ－ＰＪ３号住内で落ち込みが確認されたピットの調査を行ったが、全截に終えたピットは２基で、残りの13基は全截にまでは至らなかった。調査を行ったピットの多くが柱穴と思われる。半截したところＳＷＵ－ＰＪ３号住の柱穴は、テラスをもった２段の柱穴となっているものが多い特徴がうかがえた(写真22)。Ｐ７からは石皿を伴う数点の土器片も出土した。時期は勝坂式期に相当する(写真19)。

また、Ａ－７グリッド拡張区を設定し掘り下げを行ったところ、Ｂ・Ｃ－７グリットの東西方向に検出されていた１号道路状遺構の続きが検出されたので、その調査も行った(図６左　写真16)。中世から近世期のものと判断される。

来年度の調査では、半截を終えた柱穴等の完掘及び竪穴住居の南側を拡張して壁の確認を行い、住居全体のプランを明らかにさせるとともに、石囲炉址の内部調査を実施したい。なお、底部穿孔倒置深鉢形土器を検出した４号土坑の北側に置かれた平石は精査の結果、この住居址に伴うものと判断された。　(髙野　舞)

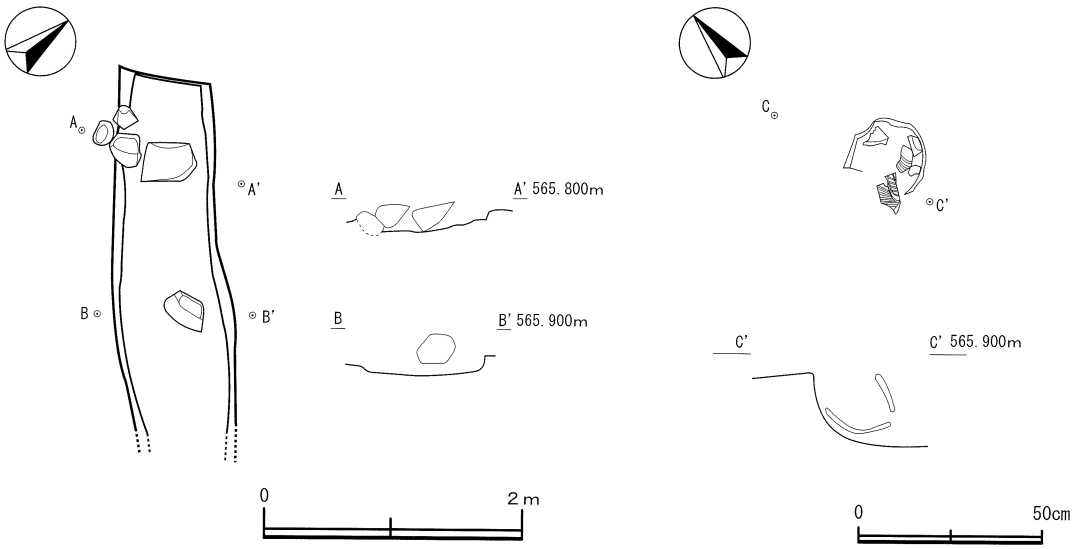

図６　Ａ－７グリッド　１号道状遺構(1/60)・ＳＷＵ－ＰＪ３号住　覆土中遺物出土状態(1/40)

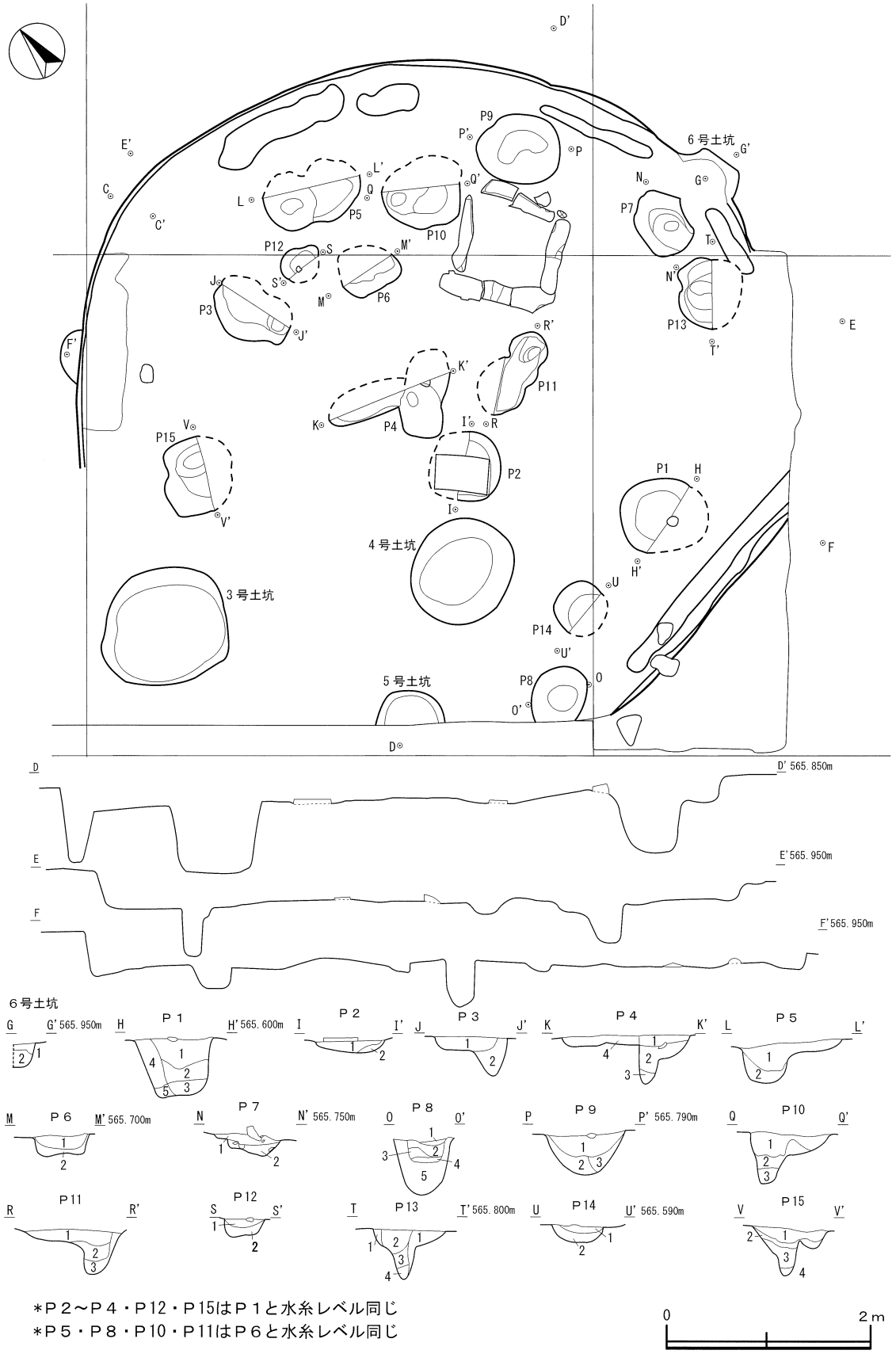

図７　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　発掘現況図(1/60)

ＳＷＵ－ＰＪ３号住土層注記

６号土坑
1:7.5YR3/2　黒褐色　粘性ややあり、しまりあり
2:7.5YR3/2　黒褐色　１mm程の橙色スコリア粒を10%含む、
　　１層より粘性なし、しまりあり

Ｐ１
1:10YR3/4　暗褐色　粘性・しまりややあり
2:10YR4/4　褐色　粘性・しまりややあり
3:7.5YR4/4　褐色　１mm以下の黒色粒５%含む、粘性・しまりあり
4:10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性なし・しまりややあり
5:7.5YR3/4　暗褐色　粘性・しまりあり

Ｐ２
1:10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性・しまりなし
2:10YR4/6　褐色　粘性・しまりなし

Ｐ３
1:10YR3/3　暗褐色　１mm以下の１%黒色粒含む、粘性なし、しまりややあり
2:10YR4/4　褐色　粘性なし・しまりあり

Ｐ４
1:10YR4/4　褐色　粘性なし、しまりややあり
2:10YR4/3　にぶい黄褐色　粘性なし、しまりややあり
3:10YR3/4　暗褐色　１mm以下の橙色スコリア粒５%含む、粘性・しまりあり
4:7.5YR4/3　褐色　１mm以下の黒色粒３%含む、粘性・しまりなし

Ｐ５
1:7.5YR4/3　褐色　１mm以下の橙色スコリア粒３%・黒色粒３%含む、
　　粘性・しまりあり
2:10YR4/3　にぶい黄褐色　１mm以下の橙色スコリア粒５%含む、
　　粘性ややあり、しまりあり

Ｐ６
1:10YR3/4　暗褐色　１mm以下の黒色粒５%含む、粘性ややあり、しまりあり
2:10YR4/6　褐色　１mm以下の黒色粒７%含む、粘性なし、しまりあり

Ｐ７
1:7.5YR4/4　褐色　粘性なし、しまりややあり
2:7.5YR3/3　暗褐色　粘性ややあり、しまりあり

Ｐ８
1:10YR4/3　褐色　１mm以下の橙色スコリア粒５%・黒色粒３%含む、
　　粘性・しまりなし
2:10YR3/4　褐色　粘性あり、しまりややあり

Ｐ９
1:7.5YR3/4　暗褐色　粘性なし、しまりあり
2:7.5YR3/3　暗褐色　１mm以下の黒色粒１%含む、
　　粘性ややあり、しまりあり
3:7.5YR4/3　褐色　１mm以下の黒色粒３%含む、粘性なし、しまりあり

Ｐ10
1:10YR3/4　暗褐色　粘性ややあり、しまりあり
2:10YR4/6　褐色　粘性なし、しまりあり
3:7.5YR4/3　褐色　粘性・しまりあり

Ｐ11
1:10YR4/6　褐色　粘性なし、しまりあり
2:10YR3/4　褐色　粘性なし、しましあり
3:7.5YR3/4　暗褐色　粘性ややあり、しまりあり

Ｐ12
1:10YR3/4　暗褐色　１mm以下の黒色粒５%含む、粘性なし、しまりあり
2:10YR3/3　暗褐色　１mm以下の黒色粒５%含む、粘性ややあり、しまりあり

Ｐ13
1:7.5YR4/6褐色　粘性ややあり、しまりあり
2:10YR3/3　暗褐色　１層より粘性・しまりあり
3:10YR3/4　暗褐色　１mm以下の黒色粒３%含む、粘性・しまりあり
4:10YR4/4　褐色　１mm以下の黒色粒３%含む、
　　３層より粘性あり、しまりあり

Ｐ14
1:10YR4/3 にぶい黄褐色　１mm以下の橙色スコリア３%含む、
　　粘性なし、しまりややあり
2:10YR4/6　褐色　粘性なし・しまりややあり

Ｐ15
1:10YR4/4　褐色　１mm以下の橙色スコリア粒１%含む、
　　粘性なし、しまりあり
2:7.5YR4/4　褐色　１mm以下の黒色粒１%含む、粘性ややあり、しまりあり
3:10YR3/4　暗褐色　１mm以下の黒色粒３%含む、粘性ややあり、しまりあり
4:10YR4/3　にぶい黄褐色　２mm以下の黒色粒１%含む、粘性・しまりあり

3:7.5YR3/3　暗褐色　１mm以下の黒色粒３%含む、粘性・しまりあり
4:10YR4/4　褐色　粘性あり、しまり３層よりあり
5:10YR3/4　暗褐色　粘性強い、しまりややなし

写真15　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　南側から

写真16　Ａ－７グリッド　１号道路状遺構

写真17　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　土器出土状態

写真18　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　Ｐ８遺物出土状態

写真19　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　Ｐ７

写真20　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　石囲炉址と柱穴

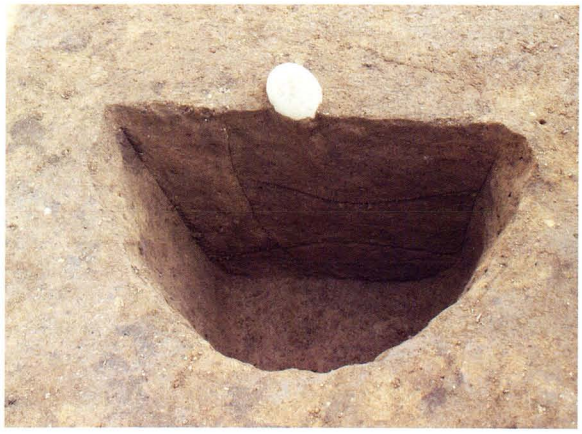

写真21　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　Ｐ１土層断面

写真22　ＳＷＵ－ＰＪ３号住　Ｐ13土層断面

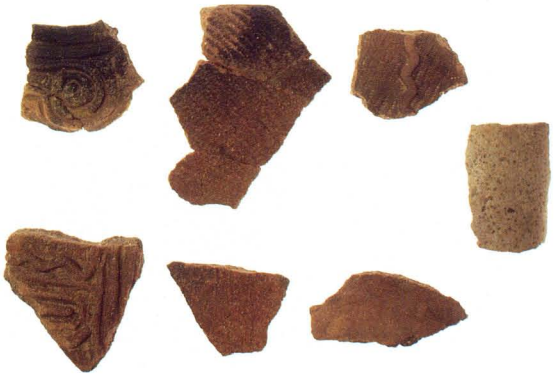

写真23　ＳＷＵ－ＰＪ１号住　Ｐ１出土遺物
Ｐ３出土遺物（石棒破片）

写真24　ＳＷＵ－ＰＪ２号住　４号土坑出土遺物

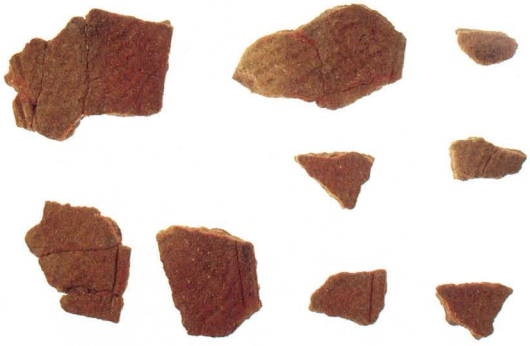

写真25　ＳＷＵ－ＰＪ２号住
Ｐ６出土遺物

写真26　ＳＷＵ－Ｐ３号住 覆土中出土遺物

写真27　ＳＷＵ－ＰＪ２号住
２号土坑出土遺物

５．まとめ

諏訪原遺跡の発掘調査も本年の調査で４年目となった。毎年、大学の夏季休暇に入ってすぐに、２週間の予定で発掘調査を実施してきた。遺跡への行き帰りに２日間とられるので実働12日間という短い発掘調査期間であり、毎年の調査の進捗状況は遅々たるものである。ただ、学術調査ということもあり、毎年、発掘できたところまでで、いったん終了して埋め戻し、来年の調査に備えるという気楽さがあるのが救いといえよう。しかし、小範囲ながらも年々発掘範囲が広がることや、遺構の調査の進み具合により、埋め戻さなければならない土量も増えてきた。調査で排出した土砂はすべて土嚢袋に入れて埋め戻しのさいの負担軽減を図ってはいるものの、埋め戻しに充てることができるのは、調査最終日に全体の写真を撮影したあとの半日程度で、学生たちも最終日の体力消耗は著しい。とくに、本年の夏は、ことのほか厳しい暑さが続き、参加した学生たちの中には熱中症にかかった者も一部出たため、健康に留意して参加途中で帰宅させたこともあった。大学での考古学教育は、遺跡の発掘調査という実践の場が不可欠である。幸い、北杜市教育委員会のご協力と土地所有者の暖かいご理解があり、毎年順調に諏訪原遺跡の調査が継続されてきた。今後とも調査を継続し、本学科の「手で考え、足で見る」というモットーを実践するの場としていきたいと思う。

さて、今年度の調査は、調査経緯と経過でも触れたように、これまでに検出され調査を行ってきた竪穴住居址ＳＷＵ－ＰＪ１号住とＳＷＵ－ＰＪ２号住の２軒の継続調査と、昨年度新たに確認されたＳＷＵ－ＰＪ３号住の調査を行った。また、昨年度設定したものの調査ができなかったＡ－７グリッドの東半部の調査を行った。ＳＷＵ－ＰＪ１号住は、調査区範囲内での柱穴と周溝調査を実施し、図面を作成し、ほぼ調査を終えることができた。来年度は、Ｄ－５と６グリッド側に調査区境界ぎりぎりまで拡張して調査を継続する予定である。ＳＷＵ－ＰＪ２号住は調査区内での柱穴等の調査を継続し、図面を作成し、ほぼ調査を完了することができた。柱穴番号を今回の調査で変更している。ＳＷＵ－ＰＪ３号住は、すでに調査を終了していたＣ－７グリッド西半部を再発掘し壁面の確認を行った。また、プラン内に確認されていた柱穴状の落ち込みの半截調査を実施した。来年は、柱穴の全截と周溝、石囲炉址の調査を行い全貌を明らかにさせたい。

また、今回新たに調査したＡ－７グリッドからは、Ｂ・Ｃ－７グリッドに検出されていた１号溝状遺構の続きが発見され、その調査を行った。その下面を調査し、縄文時代の土坑状の落ち込みを確認している。これらについては来年度調査を実施する予定である。

（山本暉久）

写真28　諏訪原遺跡　小学生発掘体験　10.8.14

写真29　埋め戻し後の全景　10.8.22

調査参加者名簿

教　　員　山本暉久(大学院生活機構研究科教授)・小泉玲子(人間文化学部歴史文化学科准教授)

助　　手　石井寛子(人間文化学部歴史文化学科)

大学院研究生　大野節子(生活機構研究科)

大学院修士課程１年　鑑田夏実・髙野　舞

歴史文化学科

学 部 生　**４年**　飯島萌・大森咲子

３年　小川美保・佐藤未幸・梶間瑛美理・小林寛子・山田裕子

２年　会田彩乃・會田成美・石松　澪・石渡真弥・大和田恵・岡村　愛・加藤千尋
酒井貴美子・清水志保・杉山美里・関根　藍・高野愛弓・富田望由季・中村美結紀
馬場夏希・増田静香・三田有紗・渡辺詩織

Ｏ Ｇ　石川真理子(大学院修士課程修了・松本市教育委員会)

写真30　前半参加者記念写真

写真31　後半参加者記念写真

諏訪原遺跡関連文献

佐野　隆　1996「発掘調査速報　諏訪原遺跡」『年報－平成７年度－』　北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野　隆　2003「発掘調査速報　諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成14年度年報－』　北巨摩郡市町村文化財担当者会

佐野　隆　2004「発掘調査速報　諏訪原遺跡」『八ヶ岳考古－平成15年度年報－』　北巨摩郡市町村文化財担当者会

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科　編　2007『山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報2007年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科　編　2008『山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報2008年度』

昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科　編　2009『山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報2009年度』

報　告　書　抄　録

ふ り が な	やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり　すわはらいせきはっくつちょうさがいほう
書　　名	山梨県北杜市明野町上神取　諏訪原遺跡発掘調査概報　2010年度
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 集 者 名	山本暉久・小泉玲子・大野節子・鑑田夏実・髙野　舞
編 集 機 関	昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科
所　在　地	〒 154-8533　東京都世田谷区太子堂１－７　昭和女子大学　　TEL　03-3411-5373
発 行 年 月 日	西暦　2010年12月15日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
すわはらいせき 諏訪原遺跡	やまなしけんほくとしあけのまちかみかんどり１５５８－１	19-209	01-014	35度 48分 ２秒	138度 26分 37秒	20100809 ～20100821	約100㎡	縄文時代環状集落址形成過程の研究にかかる学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諏訪原遺跡	集落址	縄文時代	竪穴住居址３・中世道状遺構１	縄文土器・土製品 石器	縄文時代中期の大規模環状集落址で、2007年度より、昭和女子大学人間文化学部歴史文化学科が調査主体となって、中期環状集落形成過程解明のため、学術発掘調査を継続している。本年度は、2009年度まで調査を行った縄文時代中期の竪穴住居址３軒の継続調査他を実施した。

ＳＷＵ－ＰＪ１～３号住居址

山梨県北杜市明野町上神取
諏訪原遺跡発掘調査概報
２０１０年度

発行日　2010年12月15日
発行者　昭和女子大学人間文化学部
歴史文化学科
〒154-8533　東京都世田谷区太子堂１－７
TEL　03-3411-5373
FAX　03-3411-7059
印刷　野崎印刷紙器株式会社